

して60年代のアジアの時代像を問題にし、将来に希望を見出そうと努力している。第5の論文“India Today”は、インドがいま“in making”なのか、in breaking”なのかを問題にする。その解答を、インド人学者の文献のなかに求めようとするが、解答は得られない。第6の論文“The Name and Nature of Foreign Aid”は、外国援助を外交史上の新しい現象とみなし、これのもたらす効果や問題点を扱おうとする。しかし、表面をなでるだけに終わっている。ただ、外国援助の一環としてやってくる技術専門家が、エアコンのある立派な家に住むとどうということになるか、かれらはどうして短期間の旅行だけで帰って行くか、などのシニックなアプローチが効果的である。第7の論文“Broken-Backed States”では、「東南アジアの国々は、西欧の国々なら国家の危機の原因になるインフレや革命などが危機にはならない。なぜなら社会がルースだからだ。」という命題を提出している。東南アジアの国家の強みは、“survival”できるところにあるという。第8の論文“Race, Nationalism and Communalism in Asia”では、こと民族対立の問題に関する限り、欧米とアジアとで、問題の性質は同じである、という判断がなされている。

以下ははぶかう。しかし、このように、どの一つをとっても、着目点が卓抜で、解答もまた明快である。アジア問題についての一般の評論集として推薦したい。Tinker の評論は、今後マークしなくてはならないようだ。(矢野 暢)

William Marsden. *The History of Sumatra*. A reprint of the third edition introduced by John Bastin. Kuala Lumpur: 1966. x + viii + 488 p.

著者は1754年にアイルランドで生まれた。兄 John Marsden が英国東印度会社の西部スマトラ駐在官を勤めていたので、Port Marlborough の書記官に任命され、1771年5月にベンクーレン（南部スマトラ西海岸の市で、会社の香料貿易の根拠地）へ赴き、1779年7月にスマトラを去った。この間の調査・収集材料、職務上得た資料をもとに兄や友人からの情報をとり入れて、1783年にこの本の初版を

出した。その後新しい資料を得て改訂増補し、1811年にその3版を出したが、この本はそれを覆刻したもので、第3版に新しく加えられたスマトラ島の珍しい動植物や当時の景観の図版26葉が巻末に収められ、John Bastin の紹介が附された。第3版が稀覯書になっている現在、今度の覆刻は非常に喜ばしい。

本書の記述内容はそのフルタイトルが端的に示している。*The History of Sumatra, Containing an Account of the Government, Laws, Customs, and Manners of the Native Inhabitants, with a Description of the Natural Productions, and a Relation of the Ancient Political State of that Island.*

すなわち本書は「スマトラ誌」と称すべきもので、Raffles の「ジャワ史」、Crawfurd の「インド群島史」と並んで、英人の手になるインドネシア研究の古典とされている。

ところで著者の採った方針は、自分の見聞範囲内でスマトラ全体を概括的に記述し、同島を個々の地域、種々の居住民に分けて各々を詳論するよりも、むしろ同島の標準タイプともいべき地域・原住民を取り挙げて、歴史・社会・法制・風俗・宗教の各面から包括的に観ることにあった。著者の標準選定は、今日の進歩した民族・社会学から見れば妥当性を欠くようだが、その記述は正確である。なおヨーロッパ勢力のこの島との接触、およびその植民過程・支配体制それに通商状況はあまり触れられていない。ただ近世以来ヨーロッパ勢力と交渉を頻繁にもったアチェーの16世紀以後の歴史が概観されており、注目される。

この本は初版以来目次も章別もなく、23群（旧版では21群）の見出し語の下に各々独立した叙述が成されているので、いささか不便である。また本書が記された当時は、スマトラ島の大部分および西部沿岸島嶼がまだ十分に調査されておらず、観察技術も整っていなかったのも、今日から見れば物足りない点も多い。しかし本書がインドネシアの民族誌・言語・慣習法の研究上、先駆的役割を果たしたことは周知の事実である。ちなみに著者にはマライ語文法・マライ語辞典の2名著がある。

(中島慎二郎)